

高等教育機関としての専門学校教育の強みと今後の方向性について

福岡大学人文学部（教育・臨床心理学部）教授 植上一希

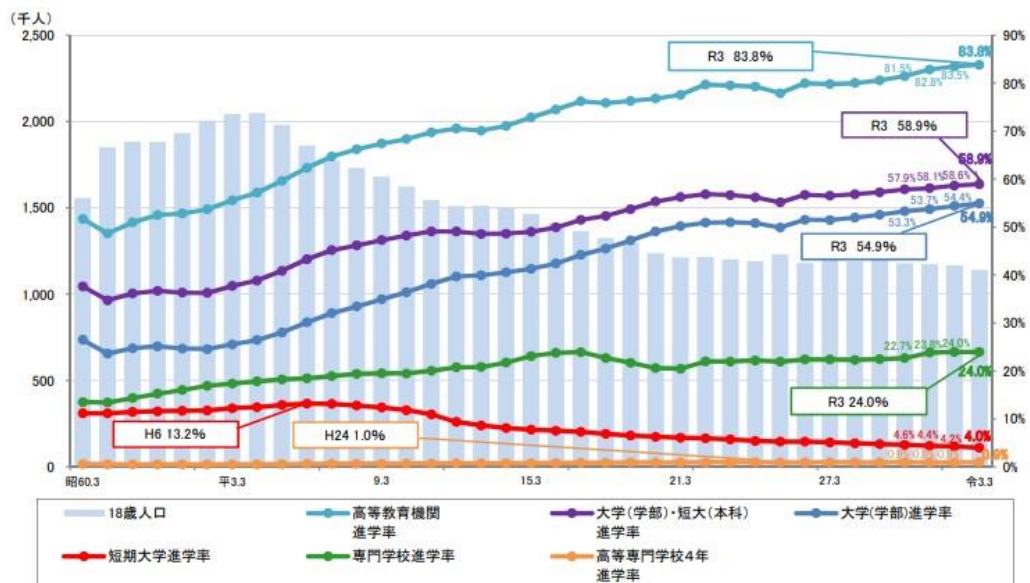
1. はじめに

はじめまして、私は長年、専門学校に関する研究をすすめております植上と申します。本日はよろしく申し上げます。

はじめに考えてみたいのが今、高等教育に何が求められているのかという点です。特に、高等教育の「入口」と「出口」に着目して、次の2つの観点から考えてみたいと思います。

まず入口である進学者の高等教育機関へのニーズはどうなっているのかという点についてです。また職業社会、企業側の高等教育ニーズはどうなっているのかということも、簡単に見ていきます。

18歳人口と高等教育機関への進学率の推移



『令和3年度学校基本調査』

18歳人口はこの30年で半減し、今後も減少していく。
高等教育進学率は上昇。専門学校進学率は微増傾向。

18歳人口と高等教育機関への進学率の推移のグラフをご覧ください。若者側に焦点を当てた場合、まず18歳人口の減少はこの30年間に半減しており今後も減少の見込です。この状況では進学者獲得のあり方が非常に大きなポイントになります。進学率の推移をみると学歴の価値は客観的には低下しています。また現代の高校生と高校生の親世代では感覚もずれています。今の親御さんを40～50歳台とするならば、親御さんの世代が1990年前後に高校を卒業した頃は大学進学がなかなか難しい時代でした。しかし、大学全入時代に突入した現代では、高等教育機関への進学価値が下がっています。選抜自体が緩くなり偏差値中以下の選抜度に関する信頼性は低下しました。高等教育機関への進学ニーズとして従来高い位置を占めていた学歴・学校歴に関する客観的な価値が低下したものの、まだ親世代の主観的判断が子どもへ大きく影響しています。

一方、職業社会に目を向けると、職業社会におけるキャリア形成のあり方も大きく変化しています。高校までの学力の高さ（≡学歴・学校歴）を重視する見方から、高等教育段階で学び・成長する人材を重視する見方へ変わりつつあります。そして、そういった社会の変化に伴い、若者のキャリア意識も多様化しています。若年層の意識や、職業社会のニーズという面では学歴・学校歴より、学び・成長の内実・関連性が求められる時代になっているのは間違いなく、将来への関連性も含め学びを考える必要があります。企業側も、高等教育機関でどのような教育がなされたか注視している時代です。

2. 専門学校の強みとは？

こうした認識をもとに、専門学校も差別化の方向性を考える必要があります。まず、重要になるのは、専門学校における学びや成長の特徴と強みを把握し発信することです。専門学校生の学び・成長の特徴と強み、専門学校で獲得する能力の職業的レリバンス（関連性）を企業側や若年層に発信することが大事なポイントになります。自校・自学科の学生の学び・成長の特徴・強みを知り、自校・自学科で獲得する能力の職業的レリバンスの発信が必要になるでしょう。

こうした問題意識にもとづき、本日のセミナーの目的と構成を設定しました。専門学校生の学び・成長の特徴（強み）、専門学校で獲得する能力の職業的レリバンスの特徴（強み）という2つの観点を重視し、とくに以下の3点に焦点を当てて検討していきます。

- ・職業を軸とした価値観形成・成長イメージの獲得
- ・学習意欲、成長実感、自信の獲得
- ・非認知能力の成長と職業的レリバンスの重要性

さて、専門学校教育の「強み」とは何か。改めて強みを考えた時、先生方はどう答えるでしょうか。自由なカリキュラム、柔軟な学科・コース設定は専門学校教育制度の強みと言えるでしょう。また、多様な対象への対応という専門学校ならではの強みがあります。18歳だけでなくリカレント教育・成人の学び直し、留学生教育、青年期教育等などが多様に展開されているのも、専門学校教育の強みに他なりません。それらをふまえたうえで、特に本日、焦点をあてたいのは、教育内容・教育方法の強みに関してです。

専門学校の多くは職業教育ですが、職業教育だからこそその学び・成長、職業的レリバンスの明確さ・強さが強調できると思います。一般的にイメージされやすい職業教育の強みとは、それぞれの職業に必要な専門的な知識・技能と、それぞれの職業に必要な資格取得等でしょう。これらも重要ですが、それ以外の強みも強調される必要があると考えます。とくに私が重要だと考えるのが、先にも述べた、3点（職業を軸とした価値観形成・成長イメージの獲得、学習意欲の向上・成長実感・自信の獲得、非認知能力の成長と職業的レリバンスの重要性）です。これらは、日頃の実践では重視されているものの、データ等によると、まだまだ専門学校の強みとして発信されてないと思われます。データなどを紹介しながら、見ていきましょう。

3. 職業を軸とした価値観形成・成長イメージの獲得

まず職業を軸とした価値観形成・成長イメージの獲得について。今は若者たちのキャリア形成が多様化し、若者にとってモデルが見えにくい時代です。だからこそ価値観形成や成長イメージを獲得したいというニーズが高まっているととらえています。それに応える意味で専門学校には強みがあります。具体的には、職業社会のメンバーになる・するという目的の共有です。

調理師を例にすると以下の通りです。先生方、非常勤講師の業界の方々は皆、学生が卒業したら業界のメンバーにするという目的を持って教育しています。これは専門学校以外の高等教育機関では当たり前ではないのです。なお、職業社会のメンバーを育てるための企業等との連携があるのも専門学校教育の特徴です。学習側と教育側が職業的社会的という目的を共有していく、企業側と連携していくことにどのような意義・効果があるかを考えると、3つのポイントがあると思います。



第1が学生（若者）をメンバーとして受け入れようとする姿勢です。職業教育を通して若者を自分たちの社会のメンバーとして受け入れようとする姿勢、それ自体がまず貴重です。自分たちの社会が魅力的で、社会へ入って来ないかという姿勢を職業人が見せていくことで若者たちの職業社会への信頼感醸成につながります。

第2が同一の職業社会のメンバーとしての信頼関係醸成です。職業教育を通じて、教員・学生間で、また、学生同士で信頼関係が醸成されていくのも、専門学校教育の特徴と言えます。

第3がキャリア形成のロールモデルが見えやすいという効果です。キャリア意識が多様化するなか、若者に聞き取り調査をするとロールモデルへのニーズが高いと分かります。若者は将来どうなりたいか、自分はどのような自信が持てるかを悩んでいる人が多いなか、専門学校ではロールモデルが得やすいため、それも強みになると思います。

また、価値観形成も専門学校教育の大きな特徴です。専門学校において価値観形成は重視されており、その学習過程で学生は様々な価値観を形成しています。人はそれぞれの職業社会に存在する固有の価値観を知り、習得・研磨していくことで、その職業社会のメンバーとして認められていきます。逆に言えば職業社会の価値観を身につけることができないと、職業社会のメンバーになること（参入や定位）はできません。自分自身の価値観も形成していくなかで、自分なりの職業社会への接近・参入・定位の仕方を見定めていくこともできるようになります。例として料理人であれば、どのような料理人になりたいのか、どのような職場で働きたいのか、どのような料理を作りたいのか等です。大学等の教育で価値観形成がなされないという訳ではないのですが、就活等の段階で自分自身の価値観について悩む学生が多いことを考えると、専門学校教育の強みとしてとらえてよいでしょう。

4. 専門学校生の学習意欲、成長実感、自信の獲得

次に考えたいのは現在の若者たちの自信の無さ、高校までの学習習慣・意欲の低さについてです。専門学校での学びはこのような問題点の解決において効果的だと考えられます。

○国際比較で際立つ 「失敗者」としての感覚の強さ

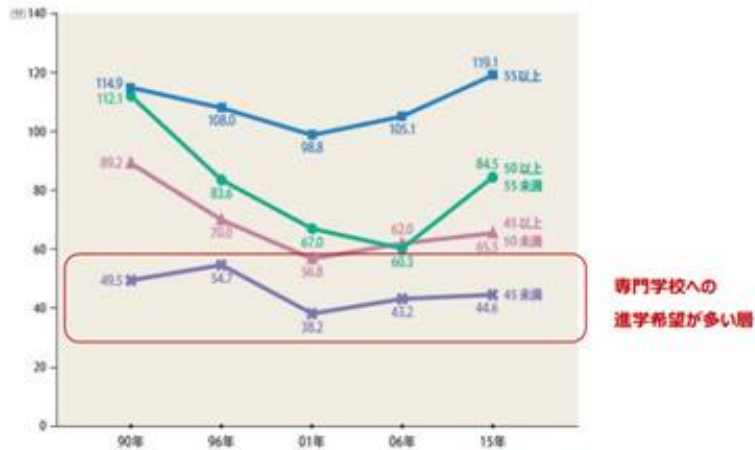
自分はダメな人間だと思ふことがある

日本:72.5%
アメリカ:45.1%
中国:56.4%
韓国:35.2%

国立青少年教育振興機構『高校生の生活と意識に関する調査報告書-日本・米国・中国・韓国の比較-』
(2015)

4. 高校生の学校外の平均学習時間（学校偏差値帯別・高校2年生）

Q: あなたは普通学校での授業以外に1日にだいたい何時間くらい勉強していますか。（塾や予備校、家庭教師との勉強時間含む）



注1) 平均学習時間は「ほとんどしない」を0分、「3時間30分」を210分、「それ以上」を240分（勉強時間は「2時間」を120分、「それ以上」を150分）
注2) 90年は、学校の平均偏差値ではなく、学校の進学実績を勘定して区分している。

※ベネッセ教育総合研究所「学習基本調査」（2015）、高校生データ

スライドにあげているように、日本の若者全体に失敗者としての感覚が広がっています。自分に自信を持ってない若者の自信回復は、大きな課題です。また、学習習慣・意欲の低さも問題です。こうした問題に対して、専門学校が教育のなかで様々な役割を果たしていることは大きく発信していきたいと思えます。

専門学校生の学習意欲の回復

ベネッセ教育総合研究所
「専門学校生の学習と生活に関する実態調査」（2017年）

関心・興味： 高校時代と比べて学びに対する態度が積極的に

【高校時代を振り返って】

【現在】

「授業に関心・興味をもてなかった」

「授業に関心・興味をもてない」

46.9%

→

33.1%

【-13.8p】

※「とても+まああてはまる」の合計%

【参考】

調査の条件が異なるので単純には比較できないが、大学生を対象にした調査では、「（高校時代）授業に関心・興味を持てなかった」（とても+まああてはまる）は46.8%、「（現在）授業に関心・興味を持てない」（よく+たまにある）は68.7%であった。

*ベネッセ教育総合研究所「第3回大学生の学習・生活実態調査」2016

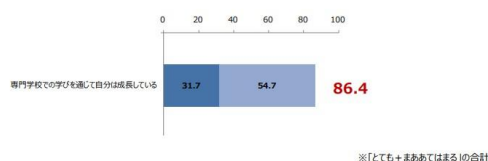
ここで着目したいのが、専門学校での学習意欲の回復機能です。上のスライドにもあるように、大学と比したとき、その差は歴然としています。その要因は自分の好きなことを学べる、具体的な職業世界を学べるという点からきていると考えられます。例えば、通信制や定時制での高校の勉強にあまり興味を持てなかった学生が、専門学校では生き生きと勉強しています。高校まで学習習慣が身につけていない、自信が持てなかった子供が専門学校教育で回復していけるというのも大きなポイントです。

専門学校生の成長実感の高さ

専門学校生自身の成長実感が高いというデータが出ています。

●学びを通じた高い「成長実感」

Q:これまでの学生生活を振り返って、次のようなことはどれくらいあてはまりますか。



上が専門学校生の成長実感。86.4%という割合。「とても実感する」31.7%。

下が大学生の成長実感。73.6%という割合。

Q 大学の各学年における成長実感について、あてはまるものを1つお選びください。(2016年)

図4-11 成長実感



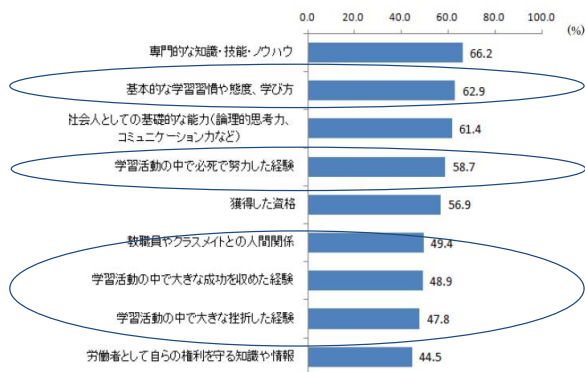
いずれもベネッセ調査。「専門学校生の学習と生活に関する実態調査」「第3回 大学生の学習・生活実態調査報告書」

学習習慣や自信の獲得は卒業後にも役立つ

ベネッセ教育総合研究所

「専門学校での学びと社会への移行に関するふりかえり調査」(2016年3月)

Q 次のような専門学校時代に身に付けたことや経験は、これまでのあなたの職業生活にどのくらい役立っていますか。



※「とても役立っている」+「まあ役立っている」の%。

専門学校における教員たちの支援の厚さ

④教員との関係：教職員による手厚い「チーム支援」

専門学校生の8～9割が何らかの形で自らの学びを支援してくれる教員が「いる」と回答。

●自分を支援してくれる教職員の有無

Q:あなたには次のような教員や職員がいますか。あてはまる番号1つに○をつけてください（「いる」「いない」の2択）。



※「いる」の%

「専門学校生の学習と生活に関する実態調査」

こうした背景に、専門学校における教員と学生の良い関係があると考えています。単純比較はできませんが、大学生への調査では教職員と学生の良い関係は概ね5割以下、2割3割の交流しかないと回答しています。学生との距離は、はるかに専門学校が近いのです。

専門学校の先生にお話を伺う度に、先生方への敬意を持ちます。専門学校へ進学するなかには様々な困難を抱えている学生もおられ、全員を社会に送り出すのが教員の役割という誇りと責任を持ちながら、丁寧に向き合っておられる専門学校教職員が非常に多いと感じます。

5. 非認知能力の成長と職業的レリバンスの重要性

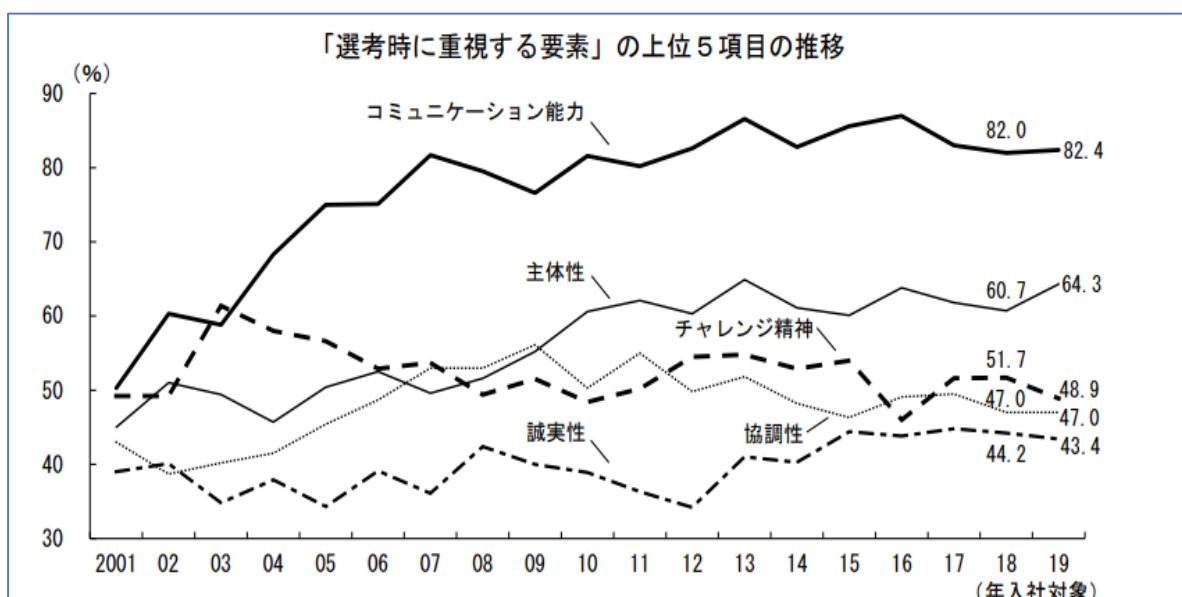
最後に専門学校で学べる非認知能力について話します。

本来、能力とは実に多様です。しかしながら、高学歴重視の頃は学力や勤勉さといった能力が特に評価される社会でした。今後はそれだけでなく、様々な能力が評価される社会になるのではないかと思います。実際、いままで学問的にも社会的にも評価されてこなかった、もしくは見つけられなかった能力を言語化していこうという動きが高まっています。例えば、認知能力と非認知能力とを区別する動きも出てきました。非認知能力とは、言語化しにくく数値化しにくいですが、現場で重要視されたり、今後の社会変容の中で重視されていく能力で、最近、話題になっています。図に挙げたのは一例ですが、様々な能力が非認知能力としてカテゴライズされています。

④問題解決力	⑤批判的思考力 ※1		
⑥協調性	⑦コミュニケーション力	⑧主体性	⑨自己管理能力
⑩自己肯定感	⑪実行力	⑫統率力	⑬創造性
⑭探究心			
⑮共感性	⑯道徳心	⑰倫理観	⑱規範意識
			⑲公共性

こうした能力に着目した時に今回私がお伝えしたいのは、専門学校を通して専門学校生は非認知能力を様々な形で獲得しているという点を、しっかりと把握して発信する必要があるということです。先生方から、教育目的や教育方法において非認知能力の獲得が実践されているという話をお聞きします。学生や卒業生からも同様です。もちろん専門知識・技能・資格は必要ですし大きなアピールポイントですが、それ以外にも、専門学校における実践的な職業教育を通して、非認知能力が多様に育成されている点をさらにアピールする必要があるでしょう。

ベネッセの「専門学校での学びと社会への移行に関するふりかえり調査」によると、大学と比較して専門学校生は非認知能力獲得の面で上回っています。なお、就職選考時に重視される要素としてコミュニケーション能力や主体性へのニーズは重要ですが、一方、様々な調査から職業社会が新卒採用等にあたって、非認知能力を重視するようになってきていることが明らかです。また卒業生に聞くと、社会人として基礎的な能力やコミュニケーション能力が実は今、役に立っているというデータもあります。



日本経団連『2018年度 新卒採用に関するアンケート調査結果』

非認知能力には汎用性があることにも着目しておくことが大切です。ある卒業生によれば、違う業界へ転職しても専門学校で身につけた仕事の進め方、我慢の仕方、人への頼り方は、他の仕事にも通用する能力だとお聞きしました。このように、専門学校で獲得した非認知能力は汎用性を持つ場合が多くあります。キャリアチェンジにおいても、専門学校で学んだこと、前職で身につけたことが役立ったと答える人多くの専門学校卒業生も少なくありません。専門学校へ進むと特定の技能や知識だけを身につけて将来のキャリア形成が狭くなってしまうため、大学進学を勧められるという話を聞きます。こうした、専門学校教育に対して高校の先生方や親御さんが抱きがちな誤解も解いていく必要があります。

非認知能力の汎用性

聞き取り調査から—スタイリスト科⇒建築士



専門学校で身につけた仕事の進め方、我慢の仕方、人への頼り方は、他の仕事にも通用する能力です。

本気で勉強した日々は、無駄だったとは思っていません！

職業教育を通じて身につけていく汎用的な非認知能力は実際にある訳で、違う職業でも生かしているのだと、同時にPRする必要があるでしょう。

社会変化のなかで非認知能力への職業社会からのニーズは高まっています。専門学校生の非認知能力の成長・学びは、職業教育ならではの特徴をもつことを認識し、専門学校の強みとして、非認知能力の成長・学びや、職業的レリバンスを位置づけていくべきということが大切です

6. 最後に

以上、本日は高等教育の変化から始まり、①専門学校生の学び・成長の特徴（強み）を把握する、②専門学校で獲得する能力の職業的レリバンスの特徴（強み）を把握し発信していく必要があるということについてお話ししました。専門学校の強みとしては3点、職業を軸とした価値観形成・成長イメージの獲得、学習意欲・成長実感・自信の獲得、非認知能力の成長であるという点を挙げさせていただきます。職業教育には多くの魅力やポイントがあると考えていますが、これらはまだ世の中の人々に広く伝わっていないようですし、専門学校の先生方もご自身の学科の強みをアピールし切れていないように思います。専門学校の強みがどういった部分かを丁寧にとらえて発信していくという方法で、私は今後も高等教育機関としての差別化をPRしていただきたいと考えています。

長時間のご清聴ありがとうございました。